

## 令和7年度 第3回 都市計画サロン 報告

日時：令和7年10月20日（火）

参加者：16名（オンライン含む）

演題：「羽犬塚駅前地区のエリアデザイン」

講師：山下祐司氏（筑後市役所建設経済部都市  
対策課）

### 講演内容：

#### 【団体設立の背景と経緯】

筑後市役所・山下氏の発表は、JR羽犬塚駅周辺を中心拠点に据えた「防災×歩行環境×統一デザイン」による再生の全体像を、計画・組織・設計・実装・検証まで一貫通貫で示した。まず都市の現況として、筑後市は福岡県南部の非線引き都市で、JR鹿児島本線・九州新幹線・国道209/442号・八女IC等の結節性に恵まれる一方、人口は今後20年で約4,000人減の見通し、高齢化は2045年に3人に1人規模へ進行するとされた。駅周辺では平面駐車場・空地が点在する「都市のスポンジ化」、矢部川・山ノ井川流域の浸水想定（近年10年余で3度の水害）、駅前広場の送迎車滞留と動線不良、諏訪通りの暗さ・歩道狭小、公園老朽化、空き家増加が主要課題として整理された。

これらを踏まえ、市は「立地適正化計画」「都市計画マスタープラン」「地域公共交通計画」を連動させ、令和4年にエリアプラットフォームを設立、学識・事業者・行政区・交通事業者が参画する協議体でビジョンと実装のPDCAを回す体制を整備した。令和5年度には都市再生整備計画を策定し、駅前広場・諏訪通り・高架下・児童遊園・新設道路・水路・調整池を束ねた事業群を位置づけた。期間は令和6～10年度の5カ年、全体事業費約35億円で、国の都市構造再編集中支援事業等を活用する計画である。上位計画上は、羽犬塚駅周辺を「中心拠点」、船小屋駅周辺を「広域交流拠点」とし、コンパクト＋ネットワークの骨格に公共交通結節の強化、歩行空間の質向上、低未利用地の活用、災害対応力の向上を組み込んでいる。

【将来像は「便利なまちの玄関」から「居心地の良いまちのリビング」へ】

市民へのアンケート（3行政区800配布/回収率30%、駅利用者500配布/回収率46.6%、高校生1,356人対象）では、現状満足は「公共交通の充実」、不満は「空き家活用」「バリアフリー・歩道整備」、今後の重要度は「公共交通の充実」「車がなくても暮らせる環境」「防災・減災」が上位となり、駅前に望む機能は商業・飲食・休憩・学習・多目的スペース等が挙げられた。発表では、こうした民意を「防災まちづくり（外水・内水対策、避難動線確保）」と「駅前エリア活性化（歩行回遊・滞留促進・低未利用地の暫定利活用）」の二本柱に翻訳したプロセスが強調された。

設計・デザイン面の肝は、令和6年度から非常勤特別職としてデザイン専門監（高尾忠志氏）を委嘱し、都市デザイン調整会議で全体の統一意匠を貫くスキーム

を敷いた点である。旧駅舎の斜め屋根モチーフや、駅～諏訪神社の斜軸を可視化する空間構成、グリーンインフラの導入、落ち着いた基調色（えんじ）などの共通方針を定め、駅前には「北＝公共交通、南＝自家用車」のロータリー分離、改札前に人のたまりを生む環境空間、諏訪通りの歩車共存の見直しや照明改善を具体化した。調整池は、平時は公園として活用する二重機能を組み合わせ、修景とレジリエンスを両立させる案とした。

実装に向けた「試す・測る」段階として、駅待合室の家具導入・内装改善、駅前空地への人工芝・タープ・可搬家具の配置、パチンコ跡地駐車場でのイベント、停車場公民館でのワークショップ等、多点同時の社会実験を10日～1か月規模で展開。女子高生を含む滞留の増加、回遊の誘発、出店・演奏・焚き火イベントなど、まちなか“リビング”の手触りを着実に可視化した。これに加え、キッズフェスタ、3行政区合同水路清掃、防災マップ作成、先進地視察、八朔大祭での出展など、住民主体の継続的アクションが計画を社会に根づかせる装置となっている。

### 意見交換：

質疑では、①公共交通満足度が一般的傾向より高い理由（調査対象が駅周辺居住者中心で、鉄道・バスの結節性が相対的に高い立地条件による）、②送迎車需要に対するロータリー容量・右左折動線の妥当性、③横断歩道の配置・警察協議、④駐輪場・西側ロータリーの使われ方、⑤駐車場減少の影響と代替、⑥バス事業者（堀川、西鉄）動線や駅舎内への窓口一体化の可能性、等が掘り下げられた。山下氏は、交通量調査・駅広設計指針に基づく規模設定や北側重心の歩行需要、警察協議の進捗、既存駐車場の分散受け皿の存在、将来的なバスターミナル内待機への移行意向などを説明し、詳細設計段階での最適化余地を示した。

最後に同氏は、行政は「旗振り・調整役」であり、住民・事業者が主役、専門家が監修・助言する三位一体で推進する重要性を強調。非線引き下での用途誘導・低未利用地の再編、公的空間の利活用ガイドライン、防災と賑わいの両立といった難題に対しても、「歩みを止めず、できることから着実に」の原則で、段階的に実装し検証する姿勢を示して講演を締めくくった。

（文責：九州大学 黒瀬武史）

